



真言宗総本山
教王護国寺

東寺

トジョ

Toji Temple

国宝・梵天像（講堂内）

題字 榊 莫山

● 拝観時間

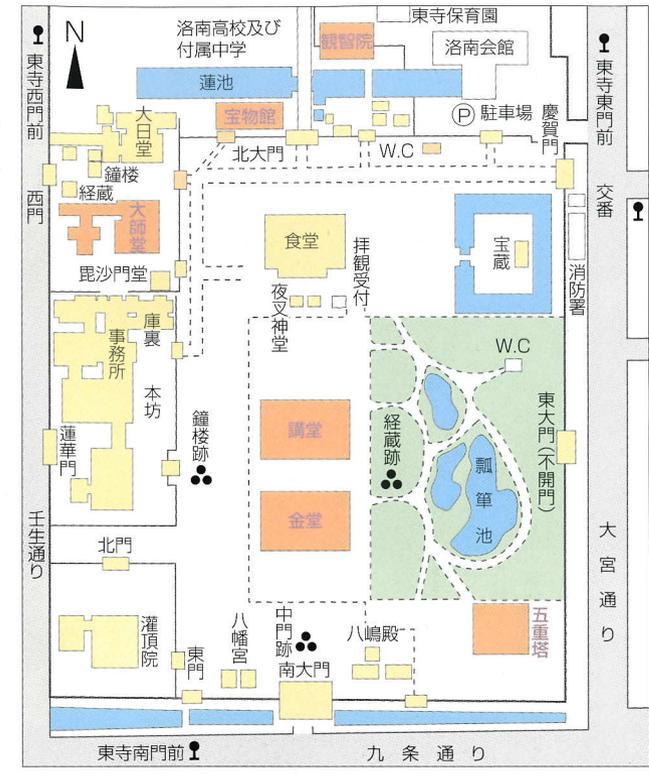
夏時間 / 3月20日～9月19日
 午前8時30分～午後5時30分
 冬時間 / 9月20日～3月19日
 午前8時30分～午後4時30分

● 宝物館特別公開

春季 / 3月20日～5月25日
 秋季 / 9月20日～11月25日

● 東寺の年中行事

初詣（五重塔） 初詣（初殿公開）	1月1日～5日
修正会（牛車即授）	1月3日
後七日御修法	1月8日～14日
初弘法	1月21日
講堂修正会	1月28日
鎮守八幡菩薩会	春・3月15日 秋・11月15日
春の彼岸会	3月21日
正御影供	4月21日 灌頂院絵馬（朱馬） ご開帳
降誕会	6月15日
万灯会（盆踊り）	8月15日（午後6時より）
秋の彼岸会	9月21日
終い弘法	12月21日
大般若会	毎月1日
布薩会	毎月15日
御影供	毎月21日
骨董市	毎月第1日曜日



東寺 东寺 Toji Temple
 TEL (075) 662-0173 <拝観受付>
 TEL (075) 691-3325 (代) FAX (075) 662-0250
 〒601-8473 京都市南区九条町1番地



重要文化財・金堂内薬師三尊・十二神将



国宝・五重塔

国宝

五重塔

江戸時代

東寺の象徴として広く親しまれている五重塔は、天長三年(八三三)弘法大師の創建着手にはじまりますが、しばしば災火をうけ、焼失すること四回におよんでいます。現在の塔は寛永二十二年(一六四四)徳川家光の寄進によって竣工した総高55mの、現存する日本の古塔中最高の塔です。全体の形もよく、細部の組もの手法は純和様を守っており、初重内部の彩色も落着いて、江戸時代初期の秀作です。



心柱を囲む四仏坐像

国宝

金堂

桃山時代

金堂は東寺一山の本堂で延暦十五年(七九六)創建されたと伝えられています。文明十八年(一四八六)に焼失し、今の堂は豊臣秀頼が発願し、片桐且元を奉行として再興させたもので、慶長八年(一六〇三)に竣工しました。天竺様の構造法を用いた豪放雄大な気風のみなざる桃山時代の代表的建築ですが、細部には唐風の技術も巧みにとり入れています。



金堂・薬師三尊・十二神将

金堂本尊の薬師如来坐像と日光、月光の両脇侍菩薩像です。光背上には七軀の化仏を配して七仏薬師をあらわし、台座の周囲には十二神将像を配しています。これら三尊像は桃山時代の大仏師康正の作で密教的な薬師信仰の形をとどめています。



重要文化財・十二神将

金堂内諸尊配置図 ©重文

◎ 日光菩薩

◎ 薬師如来

◎ 十二神将



国宝・梵天



国宝・帝釈天



国宝・不動明王



重要文化財・大日如来



立体曼荼羅

講堂・立体曼荼羅

堂内の白亜の壇上には大日如来を中心とした五智如来をはじめ、五菩薩、五大明王、四天王、梵天、帝釈天の二十一軀の仏像が安置されています。

これは弘法大師の密教の教えを表現する立体曼荼羅（密蔵浄土の世界）です。

六軀は後補像ですが、十五軀は平安時代前期を代表するわが国密教像の代表作です。



講堂内曼荼羅諸尊配置図 ● 国宝 ○ 重文

講堂

重文

室町時代



東寺の創建時にはなかつた講堂は、天長二年（八二五）弘法大師によつて着工され、承和二年（八三五）頃には完成しました。

その後大風や地震で大破し、度々修理を重ねてきましたが、文明十八年（四八六）の土揆による戦火で焼失しました。

現在の講堂は延徳三年（四九）に再興された建物で、旧基壇の上に建てられ、様式も純和様で優美な姿を保っています。



立体曼荼羅



国宝 大師堂

西院御影堂 室町時代

西院は伽藍の西北部にあり、弘法大師の住房で、大師の念持仏、国宝・不動明王像(秘仏)一軀が安置され不動堂ともよばれていました。
康暦元年(三七九)焼失しましたが、その翌年には再建され、さらに十年後の明徳元年(三九〇)には北側に、国宝・大師像を拜するための礼堂と廊を加え現在の姿となりました。
堂内には不動明王と大師像が祀られ、弘法大師信仰の中心となっている御堂です。
入母屋造りの礼堂、切妻の中門、ゆるやかな勾配の総檜皮葺の屋根がその優美さを際立たせています。



国宝・大師像

身は高野 心は東寺に おさめをく

大師の誓い 新たなりけり

延暦十三年(七九四)桓武天皇は、動乱の中に奈良から長岡京を経て平安京へと都を遷され、羅城門の東西にそれぞれ大寺を置かれました。
現在の京都は御所をはじめとして大部分が東方へずれてしまっていますが、東寺はもとの場所にそのまま残っていて一級史蹟に指定されています。東寺は左寺とも申しますが本格的に活動を始めたのは弘法大師の造営以後であります。このお寺にはアショーカ王以来の伝統に従って、仏法によって国の平和が護られ、その光が世界の隅々にまでいきわたるようにということ、それぞれの思想が共に侵さず共存していく原理を見出し伝え、共に力を合わせ実現されていくようにとの大師の願いが込められています。

東寺の伽藍は南大門を入って金堂・講堂、少し隔って食堂が一直線に置かれ、左右に五重塔と灌頂院が配置されています。扉で区別された境内はそのまま曼荼羅であり密厳浄土であります。我々はそこから様々なメッセージを汲み取る事ができます。大師はまた高野山を自らの修禪の場として開かれ、そこで得られた智慧を利他行として東寺で実践されました。生老病死に代表される衆生の苦悩の解決法とその生活への表現が大師の一生でありました。
大師は祈りなき行動は妄動であり、行動なき祈りは妄想であるとの信念から、水なき所に池を掘り、橋なき所に橋をかけ、道なき所に道をつけ、食の乏しき者には食を得る方法を教え、病む者のために良医となられたのであります。
「弘法さん」は毎月21日、大師の命日に催される京の風物詩。境内には千軒以上の露店が並び、20万人以上の人出でにぎわいます。これは大師に寄せる民衆の信仰の深さを表しているといえましょう。

東寺は平安京以来千二百年の間に幾度も台風、雷火、兵火等の災害を受け、堂塔の大半を焼失しましたが、その都度、一般民衆の信仰の力によりもとの姿に再建され、くに五重塔は古都の玄関の象徴として昔の姿のままに伝えて今日に至っております。
また大師の遺品をはじめとする、国宝・重要文化財は国民の宝であります。一人でも多くの方がご参拝下さって平安文化との出会いを通して今の自分を見つめ直し、明日への新しい糧を得ていただければ幸いです。

東寺略年表

延暦十三(七九四)	平安京に遷都する
延暦十五(七九六)	東寺の造営が始まる
延暦二十三(八〇四)	空海唐に留学する
大同一(八〇六)	空海真言密教を学び帰朝する
弘仁十四(八二三)	空海東寺を賜わる
天長二(八二五)	空海講堂および講堂諸尊の造営を始める
天長三(八二六)	空海五重塔の造営に着工する
承和二(八三五)	三月二十日空海高野山に入定する
承和六(八三五)	講堂諸尊の開眼供養する
元慶七(八八三)	五重塔完成する
寛平七(八九五)	食堂に千手観音像建立する
延喜二十一(九二二)	「弘法大師」の名を贈られる
天喜三(九五五)	五重塔落雷のため焼失する
建久八(二九七)	文覚上人東寺を修造する・連慶門講堂諸尊を修理する
天福一(三三三)	大師堂御影堂に弘法大師像 仏師康勝作を安置する
建武三(三三六)	足利尊氏本陣を東寺に置く
文明十八(四八六)	伽藍焼失する(五重塔・大師堂など残る)
延徳三(四九二)	講堂の再建を始める
明応六(四九七)	講堂の大日如来像を再建する
永祿十一(五六八)	信長入京し東寺を宿所とする
文祿五(五九六)	講堂など大地震により大破する
慶長四(五九九)	豊臣秀頼、片桐且元を奉行として金堂の再建に着手する
慶長八(六〇三)	金堂の薬師三尊像(仏師康正作)新たに作られる
慶長十(六〇五)	金堂完成する(現在に至る)
寛永十二(六三五)	この頃秀吉の北政所、講堂を修復する
寛永十八(六四一)	五重塔焼失する(四度目の災)
寛永十八(六四一)	徳川家光の発願により塔の再建を始める
正保一(六四四)	五重塔完成する(現在に至る)